

「結（ゆい）の故郷（くに） 越前おおの」

石山志保

大野市長

に聞く

石山市長は、平成三十年七月に福井県内、また北陸三県で初めての女性の自治体首長として大野市長に就任され、現在二期目を務めています。大野市では農業や環境に関して様々な取組をされています。大野市における取組や、市長のお考えなどをお聞きしました。

中田 大変お忙しい中、お時間を取つていただきありがとうございます。

本日は大野市における取組や、農業・土地改良に対する市長のお考えなどをいろいろとお聞かせいただければと思つています。

大野市のホームページを見ると、「歴史・文化・伝統が息づく、緑豊かな自然と美味しい水や食に恵まれた魅力あふれるまち」と紹介されていますが、先ずは、大野市の概要や魅力についてご紹介いただけないでしょうか。

石山 大野市は福井県の東部に位置し、岐阜県境と接する山々と盆地からなり、面積は約八七〇km²で、福井県の約二割を占めています。このうち約八七%が森林で、残る面積の部分が主に盆地になり、約二万九〇〇〇人の方が暮らしています。平成二十五年に市のブランドキャラクチコピーを「結の故郷（くに）越前おおの」と定めました。大野の市民性を示す「結（ゆい）」は、冠婚葬祭や田植え、稲刈り、土工事など村人総出で助け合つて仕事をしてきた、ふるさとを表す言葉として根づいています。

まち全体を端的に紹介申し上げる時には、天空の城と星空と美味しい水のまち、それが大野市ですとお伝えさせていただいています。また、晚秋から降雪期の時期に現れる「天空の城越前大野城」、北陸最大級の道の駅である「道の駅 越前おおの 荒島の郷（さと）」、

大野市の四つの魅力



越前おおの荒島の郷

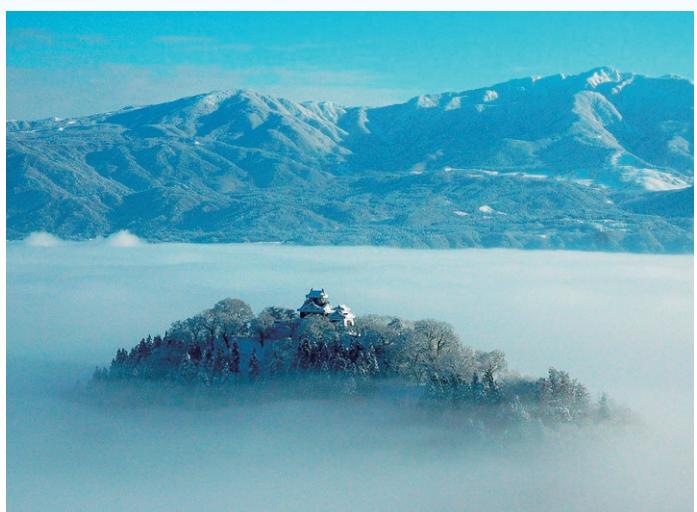




農業の原体験 ～農業が身近にあつた子ども時代～

中田 市長は愛知県の安城市のご出身と伺っていますが、私は、小学校時代に社会で安城

九頭竜湖と、アンモナイトが日本で最初に見つかるなど化石の宝庫の意味を掛け合わせて「九頭竜の恐竜・化石」、そして「日本一美しい星空・六呂師高原」の四つを大野市の魅力として積極的にアピールしています。中部縦貫自動車道が市内に延伸して高速交通網につながりましたので、日本全国から注目されるような市の魅力づくりに取り組んでいます。



天空の城 越前大野城

市は日本のデンマークと呼ばれる先進農業地域であると習いました。また、仕事等で関わりのある土地改良関係でいえば明治用水もあり、なじみのあるところなんですが、子ども時代はどのように過ごされたのでしょうか。農業との関わりなどはありましたか。

石山 はい、安城市といえば日本のデンマークと、私も小学校時代に教えられて育つてきました。実家はいわゆる兼業農家で、家族で食べるためのお米作りと畑作をして、祖父母は、自分たちは農家ではなく百姓だとよく言つていました。物心ついたときには周りが土地区画整理され、宅地化されていくという年代に入つてきましたが、幼い私を抱っこし



大野市化石発掘体験センターHOROSSA

ている両親の写真を見ると、背景にはまだ何も建っていない台地が広がっていました。自宅の庭の敷地には、自家用栽培の畑が広がっていて、主に祖母が畑をやつていました。夏になるとスイカが、秋になるといろいろな農作物ができましたし、稻は種もみから苗を育てることをしていて、私達姉弟はその周りで遊んでいました。家族皆で田植えに行きましたが、私達は手伝いじゃなくて泥んこになつて遊んでいたというような幼少時代を過ごしました。家の納屋の中にあつたトラクターや田植え機を、子供心に大きく感じたことを思い出します。

大野に来て見ますと、それらの機械がもっと大きいのですね。比較的大きい水田面積を大型で能力のある機械でもつて大野の方々は農業をされますので、すごいなつて思ったのが、大野の農業の最初のイメージです。

稻は種もみから苗を育てることをしていて、私達姉弟はその周りで遊んでいたというような幼少時代を過ごしました。家族皆で田植えに行きましたが、私達は手伝いじゃなくて泥んこになつて遊んでいたというような幼少時代を過ごしました。家の納屋の中にあつたトラクターや田植え機を、子供心に大きく感じたことを思い出します。

稻は種もみから苗を育てることをしていて、私達姉弟はその周りで遊んでいたというような幼少時代を過ごしました。家族皆で田植えに行きましたが、私達は手伝いじゃなくて泥んこになつて遊んでいたというような幼少時代を過ごしました。家の納屋の中にあつたトラクターや田植え機を、子供心に大きく感じたことを思い出します。

地球環境問題への関心から 大学・環境省へ

中田 安城市で高校まで過ごされた後、東京大学へ入学され、工学部を卒業されたということですが、大学ではどのようなことを学ばれたのでしょうか。

石山 大学では都市工学科の環境衛生コースを選択しました。都市部の、人が密集することによる課題を解決していくことをする学問です。水資源の確保、污水や廃棄物の処理を扱う分野から地球環境問題を扱う分野まで学びました。

一九九二年、私が高校生の頃に地球サミットがあり、地球環境問題が社会でクローズアップされ、

気候変動枠組条約や砂漠化対処条約、生物多様性条約などができました。石油資源には限りがあり、地球環境にみんなが目配りをしながら生活する社会が大事ということが言われ始めた頃でした。そうした頃に私は多感な時期を過ごしました。

先ほど幼少期の話をしましたが、自宅の田畑以外にも、親戚など親しくさせていただいた方々の

ところで、田んぼの水路に飛び交うホタルを見に行ったり、みかんの段々畑で遊んで草の種や葉っぱをタapisにいっぱいつけたり、イチゴハウスの中に入らせてもらつたり。自然豊かなところ、田園風景が広がるようなところで身近な人とふれ合つてきましたので、そういう世界がずっとあるといいなと思ってきました。

大学で学科選択をする時、工学系の中でも環境と合わせて人が暮らしていくことを学びたいと環境衛生コースを選びました。人の生活はもちらん大事ですけれど、生活を大事にするために、環境も大事にしていく必要があるというようなこと。

地球サミットがあり、「持続可能な開発」という言葉が言われるようになりましたが、二極対立ではなくて両方ともが揃つて存在できるように、ということを社会や大学で教えていただきました。

また、大学での部活動の一環と言つて良いと思

いますが、伊豆半島の海辺近くにある大学学生寮の夏期お手伝いに行つていました。お手伝いの合間に、海に飛び込んで思いっきり自然を満喫したり、地元の方や商工会青年部の方達と海の家などでふれ合つたり。大学の演習林も見に行きました。私はその地域で実体験したことによても興味を持ちました。けれども、地元の方々から、地方暮らし

を寂しいとか、残念に思つてゐる声を聞くことがありました。私なりに、地方に光を当ててと言いますか、地方暮らしつていいものだねつていうことができないかという問題意識を持ちました。

私の話を聞いてくださった大学の先輩から、国立公園管理や自然保護行政を担うレンジャーハウスを教えていただき、それが環境省職員を目指すきっかけになりました。

中田 お話を聞きしていると、レンジャーとして環境省に入られたつていうのは必然じやないかなども感じます。

石山 そうですね、振り返ると、私が行つた先の場所で人に出会うご縁がありまして。こちらの方が良いんじやないかとお話を伺いして、新しい世界に飛び込んだ瞬間が何回かありました。大学時代にお世話になつた方々と今になつて改めてご縁がつながつたということがありますので、どの場所でも一生懸命に取り組んだことが良かったのではないかと思います。

中田 環境省では、どのようなお仕事をされていましたか。

石山 自然保護局（当時）という部署をベースに八年間勤務しました。

一年目については、もう本当に丁稚奉公ですから、ひたすら課の窓口をしていました。二年目は箱根の国立公園管理事務所へ、三年目、四年目は単独駐在で長崎県の雲仙自然保護官事務所で現場の仕事をさせていただきました。レンジャーを志望する人はみんなそういうところに行きたくて環境省に入省されます。私の赴任地は、両方とも盆地で山に囲まれているところでした。



雲仙自然保護官事務所勤務の一コマ

雲仙に勤務していた時、雲仙普賢岳が噴火してから一〇年目の年に当たりました。住民の方と協力して雲仙温泉街の復興プロジェクトの計画作りなどを、「がまだせ」は長崎の言葉で「頑張れ」という意味なんですが、「がまだせ」を合言葉に一生懸命やりました。雲仙温泉街や国立公園の場を使って、観光をはじめとする地域振興が図れるかがテーマがありました。自然環境や美しい景色があるからこそ観光客が来る、そして温泉という人を受け入れられる場があるから発信ができるという、開発か環境かという対立ではなく統合させることで、お客さんに来ていただこうというこ

とをやりました。仕事は非常に興味深く、地元の青年観光会の同年代、二〇代、三〇代の方と一緒に活動させていたいたことはとても思い出に残っています。

中田 その頃から、既に「まちづくり」に関わっておられたということですね。

石山 人が生活するところでの基本的なインフラに関わることや、都市計画、道路計画などについて大学時代に学んだ後に、実際の現場で必要とされていることについて地元の方と膝を突き合わせて考え、進めることができました。関わらせていただいたのはまちづくりの一端でありますけれども、私にとつてとても良い経験をさせていただきました。

中田 私も雲仙が噴火する前に、長崎に勤務していましたことがあり、噴火後に島原を訪れて雲仙の変わった姿を見て、これからどのように復興するのだろうかと思つたことがあります。石山市長はじめ多くの皆さん之力によって復興が進んだのだなということが改めて分かりました。

せんでした。夫の故郷が大野市でありまして、夫から大野市は自然環境が豊かなところと聞きました。自然が豊かであり、まちなかには城下町があり、たくさんの方が生活していらっしゃると。さらに田園風景が広がっていると聞きましたので、それなら大丈夫でしようと、大野市への移住を即決しました。

初めての大野市訪問は、岐阜県境の方から入りました。当時通行可能だった中部縦貫自動車道の油坂峠道路、その先は国道一五八号を通っていました。ゴールデンウイークの山間部の景色というの木々の枝や幹が見えるのみで茶色いのです。和泉村（当時）の中心部にさしかかる辺りから芽吹いた新緑がだんだん鮮やかになりました。新緑が綺麗な山村景色から入り、さらに国道一五八号を下つて山間部から盆地に抜けてくると、田植えの時期の大野盆地の緑の景色がぱあっと広がつたんですよ。

田園が広がっている風景に、落ち着きとほつとするところを感じ、全く心配はなかつたです。

環境省を退職し、 山と自然がいっぱいの大野市へ移住

中田 平成十七年三月に環境省を退職して大野市へ移住されました。ホームページを見ると、「ご縁があつて大野市に来ることになつたときに、山と自然がいっぱいということで喜んで即決」と書いていましたが、当時のお気持ちなどをお聞かせいただければと思います。

石山 私はそれまで大野市を訪れたことがありま

市役所職員を経て 北陸三県初の女性首長へ

中田 平成十七年四月に大野市に来られて、大野市役所へお勤めをされるようになつたとのことです、ちょうど私が福井県庁に勤務をしていた時期とも重なるのですけれど、市役所でお仕事をされるようになつたきっかけというのは何かあつたんですか。

石山 大野市に移住しようと即決しましたが、何らかの仕事は続けたいという思いがありました。

仕事を探すために情報収集を始め、大野市役所職員の社会人採用試験があることを知りました。一般職の採用試験を受けて、幸いにして採用していました

中田 その後、市役所で約一三年間職員として勤務されて、平成三十年に市長に立候補されたということですが、どのようなきっかけがあつたのでしょうか。

石山 大野市役所に入つてから主に企画部門や財政部門を担当しました。また、産業振興部門では中心市街地の活性化の業務を担当いたしました。

そのため、市長の近くで仕事をさせていただく機会が多かったです。その頃から私の中で、大野市における課題を認識し始めました。自然豊かな森林フィールドがあり、盆地では田畠が広がる落ち着いたところがあり、それから城下町として人が水を大切にしながら生活している、暮らしているエリアがある。こういう素敵な環境を生かしながら、市民の生活をいかに守つていくかということが、私のテーマとしてずっとありました。

平成二十年から日本全体の人口が減少する社会へと変化する中で、当時は、どちらかというとそれに打ち勝つて、人口増加に向けて頑張るというものが全国的な動きでした。大野市は、起爆剤として中部縦貫自動車道の整備促進を図ろうと強力に要望活動を展開しました。

山崎正昭 参議院議員、岡田高大前大野市長をはじめ多くの関係者の方々の要望活動が実り、平成二十一年から二十七年にかけて事業化区間が伸びていき、早期に開通できるのではないかという雰囲気が出てきました。

そのような中で岡田前市長が勇退されることになり、せつかく前向きな機運ができるのを止めではないかという思いと、これまでの私の経験で大野市のためにできることがあるのではないかという思いがありました。それまで行政マンとして国行政と地方行政に携わり、行政のトップである市長はものすごくジャンプアップになりますけれども、挑戦してみようと思いました。

石山 私のモットーは「持続可能な地域づくり」です。市長に立候補した平成三十年当時は、持続可能な地域づくりと言ふと、財政運営上持続可能なことを、一生懸命させていただいています。

中田 今二期目をお務めですが、市長になられて大事にされていることはありますか。

自然環境や地域環境と、これまで人がつくった歴史が、大野らしさになるはずで、その部分を大事にして、残していくものは残していく、時代に合わせて変えていくものは変えていくということを、一生懸命させていただいています。

中田 今、市長から総合計画という言葉が出てまいりましたので、現在は第六次の総合計画ですか、その中でどのような分野の政策を重点的に進めておられるかお伺いできればと思います。

石山 令和三年度にスタートした第六次大野市総合計画は、令和十二年のまちの将来像を「人がつながり地域がつながる 住み続けたい結のまち」と定めています。本計画の特徴としまして、「市民と市職員が手づくり」で作成したことが挙げられます。コンサルタントに委託をせず、地区別のワークシヨップやアンケートを踏まえて、計画づくりから多くの市民を巻き込んで、作成をしました。

また、「ニューノーマルとデジタル化」、「協働

そして大野らしくとすることが大事だと思います。市の総合計画にある一〇年後のまちの将来像「人がつながり地域がつながる 住み続けたい結のまち」については、計画策定時に市民の皆さんと市職員が一緒になつて言葉を一つ一つ選んでくれました。話し合いの中で、例えば、大野市に超高層ビルを建てましょうとか、大規模な遊園地を作りましょうとか、そういうものを求めるかと言うと、そうはなりませんでした。やはり大野の歴史を大切にするとか、人々がこれまで一生懸命作つてきたものとか、あるいは大野の地形・地質、雨の降り方など、あるいは大野の地形・地質、雨の降り方という自然があつて、四季折々の固有のものを大切にされていました。

自然環境や地域環境と、これまで人がつくった歴史が、大野らしさになるはずで、その部分を大事にして、残していくものは残していく、時代に合わせて変えていくものは変えていくという

してとりくむ」ことを重視し、市民一人一人が身近に実践できる行動を「みんなができること」として分かりやすく示しています。

「SDGsを物差し」として、「七のゴールと計画の各施策を体系的に関連付けていまして、令和五年度の「内閣府SDGs未来都市」と「自治体SDGsモデル事業」に選定されました。

本市の人口減少は全国的な傾向よりも早いペースで進んでいます。人口減少を直視し、人口を維持増加させる方策はもちろんのこと、人口減少に適応した地域社会をつくる方策もあわせて、両面から総合的に取り組んでいます。

まちの将来像を実現するために六つの基本目標を設定しました。基本目標のそれぞれを端的に表す言葉である「子ども」、「健幸福祉」、「地域経済」、「くらし環境」、「地域づくり」、「行政経営」は、大野市民の関心事を良く表していると思います。

最初に「教育・子育ての充実」です。全国や福井県の中でもトップクラスの子育て支援策を、「大野ですくすく子育て応援パッケージ」としてまとめて発信しています。ライフステージに応じたきめ細かなサービスの提供が特徴です。子どもや若者を地域全体で支えるまちづくりを進めているということで、令和五年八月に子ども家庭庁が提唱する「子どもまんなか応援サポート」としての活動を宣言しました。新しい時代の学び舎作りに位置付け、小中学校の再編を進めています。保育所、小中学校、高校が連携しながら、子どもたちの一八年の育ちを切れ目なくつなぐ教育を進めています。部活動の地域移行や、国型コミュニティ

スクールなど、地域に根差した学校づくりも進めています。

次に「健やかで幸せな福祉」です。「おおのヘルスウォーキングプログラム」は、健康寿命延伸と医療費削減を目的に令和二年度に開始し、今では人口の約一〇%の市民が参加しています。参加者は歩数に応じてポイントが与えられ、ICTを通じて活動成果を見ることができることから、歩くことの意欲の継続につながっています。

令和六年三月の北陸新幹線金沢・敦賀間開業や、今後見込まれる中部縦貫自動車道の福井県内全線開通により、人の交流や物流の拡大が見込まれま



大野市の中山間地域の風景

ス。この好機を最大限に活かし事業者の稼ぐ力につなげるために、農林水産物、観光商品・サービスなどの磨き上げや高付加価値化を進めています。

二〇五〇年までにカーボンニュートラルを達成している望ましい姿を描き、脱炭素と市民のハッピーな暮らしの同時実現を図るための取り組み方針を示した、「大野市脱炭素ビジョン」を令和五年三月に策定しました。本市の約九割を占める森林の二酸化炭素吸収効果を最大限に發揮するため、民間事業者が操業する木質バイオマス発電所への間伐材の安定供給や、主伐、再造林の具現化に向け取り組んでいます。

高齢化や人口減少により自治会活動を担う人材が不足し、活動を継続していくことが困難になつ

てきているため、市内九つの公民館では、社会教育だけでなく防災対策、見守り、居場所づくりなど、住民主体で地域課題解決に向けた多方面な取組みが行われるよう支援しています。

行政においても働き手不足に対応しつつ、市民サービスを維持向上できるよう、デジタル技術を積極的に活用しています。本市は高齢化率が高く、地域コミュニティが比較的よく残つており、人のつながりも大切にしながらデジタルを活用しています。

主な施策をお話してきましたが、こうした施策を進めていくに当たり大事なことは、市民の皆さんと計画作りから一緒に取り組むことです。計画はまちづくりの道標です。市民や各種団体などが主体的に取り組む指針であることをお伝えしつつ、実行に当たっては協働で進めていっています。

中田 計画づくりだけでなく、実際の政策を進め

ていく中でも、そいつた方々に加わっていただいている、ということでしょうか。

石山 そのとおりです。実行も実行後の検証も、

毎年みんなで検証しながら、自分たちができるところを持ち帰ることもずっと続けています。

中田 計画を作った後は作りっぱなしで、一〇年経つたから作り直そうみたいなことではなくて、一年一年検証して積み重ねていくということは、ある意味市のやられていることが市民にも見えるということだと思います。

石山 総合計画の検証となりますと「産官学金労言」のそれの方々に参加していただいて取り組んでいます。

中田 農業や農村への取り組みについてお伺いします。全国的にも農村の人口の減少が進んでいて、農業の担い手の確保等が大きな課題になっていますが、大野市では、農業や農村の振興についてどのような取り組みをされているのでしょうか。

石山 大野市は、「越前おおの型 食・農業・農村ビジョン」という大野市独自の農業に関する施策を一体的に推進するための五ヵ年計画を持つています。現在のビジョンは令和四年二月に定めたものです。本市の農業や農山村などの財産を守り、未来に引き継いでいくために、目指す姿を「食と農で未来へつなぐ 越前おおの型農業」とし、実

現するために三つの柱を定め、分野ごとに基本目標や重点を置く取り組み、市が行う取り組み、みんなができる取り組みを掲げました。

今回の四回目の改訂に当たり、農と食との関係性を重視し、「農業」、



ブランド化された大野産米



大野市で採れた野菜

「農村」と並んで「食」を一つの柱としました。消費者の需要を意識することによりさらなる消費につなげ、「儲かる農業」を目指す担い手を支援する施策を盛り込

みました。また、市民全体の「食育」意識を高めることを目的とする「越前おおの食育推進計画」を統合し、「食育」に関する施策を総合的に推進しています。

大野市内の耕地は約四二〇〇haで、そのうち水田が約九七%です。福井県内の水田比率は高いのですが、特に大野市は高く、畑作がとても少ないことはメリット・デメリットの両方あると思います。農業経営体数が平成二十七年に比べて令和二年では約七割と減っていて、認定農業者数が近年約七〇団体・人で横ばいを保っていますけれども、実態を見ると個人から団体へと移ってきています。個人の認定農業者で離農される方がいらっしゃることを、現場で感じています。

昭和四十年代後半から進められた土地改良事業により、ほとんどの地域で機械化に対応した三〇a区画の圃場に整備されていますが、老朽化対策をやっていかなくてはならない時期になり、県営事業の取り組みが進められています。

耕作放棄地ですが年々増加傾向にあり、農業委員さん達の活動を拝見していますと、耕作放棄地になりそうなところを、次の耕作できる人にはどうやって渡していくかと心を碎いていらっしゃいます。

これら大野市の農業・農村の現状を踏まえて、農家、農業経営、農地を見つめてそこでの技術アップですか効率化、儲かる農業を目指していくことはもちろん大事ですけれども、そこだけを見つめ続けると少し息苦しくなってしまいます。前向きになれる外からの要素として、この食物、この農作物は美味しいねという評価とか、これを

「越前おおの型 食・農業・農村ビジョン」について

この農作物は美味しいねという評価とか、これを

食べてくれた消費者さんたちの幸せな笑顔が見られることとかですね。高付加価値をつけていくに当たりまして、買っていただける方の笑顔、消費者に受け入れられる部分を大切にすることかなと考えます。

もう一つは、中部縦貫自動車道の福井県内全線開通により来訪者が増えることを見据えて、何か美味しい香りがすること。道の駅や飲食店で大野市で、美味しい水が使われていて、なんかいい香りがするねという人が人を惹きつけるんじゃないかと考えます。

中田 美味しい香りってなかなかいい言葉ですね。

石山 ビジョンの一つ目の柱が「食」分野。目標は「食守（しょくもり）」が引き継がれているまです。「食守」とは、食を守る消費者の目もあります。食を作る現場を守る目の両方があります。二つ目の柱が「農業」分野で、目標は次世代技術を生かし多様な担い手の活躍で引き継がれている農業です。三つ目の柱は「農村」分野。目標は多様な人材の取り組みで引き継がれている活力ある農山村です。

中田 最初に言われた食守とか食文化はすごく大事なことだと思います。今米の値段が高いというようなことが話題になっていますけれど、逆に農家にとつてみれば、今まで赤字だったものが少し戻ったということでもありますし、そういうことも含め、食や農業についていかに消費者の方に理解していくか大だなと思います。食育という点では、実際に学校などでどのように取り組みをされているのでしょうか。

石山 学校給食の食材に地場産を使うことは、給食のメニューを組む時から気をつけて取り組まれています。学校給食で地場産野菜の提供を行った量の割合は、令和五年度の実績で二〇・八%ですね。令和八年度目標は三三・〇%です。また、主に小

学生が、学校給食の食材を育む畑に関わる体験活動に参加しています。各学校では食に関する年間指導計画を作成し、給食をはじめ機会をとらえて教育活動において食育を行っています。

特に、大野で生産される食材としてはお米が特徴的なので、市内小中学校給食で提供するご飯については全て大野市産米を使っています。大野市金賞

ナ褐の時に始めました。大野の子どもたちに、元で質の良いお米が採れることを知つてもらいたい、安心で美味しいお米が食べられる経験を味わつてほしいという思いもありました。大野産米を使用することで高くなる食材費については、市から補助を出しています。

中田 小さい頃から慣れ親しんだ味つて忘れられないですね。私は福井県のお隣の岐阜県高山市出身なので、高山の米は一番美味しいなど個人的に思つていて、もちろん福井に来た時には福井の米も美味しいなつて感じたんですけど、大野の子どもたちが大野のものを食べて育つことで、大野の味をずっと忘れないということは大切ではないかなと思います。

石山 高山もとても美味しいお米の産地ですね。平成三十年の米・食味分析鑑定コンクール・国際大会が高山市で開かれて、大野からも何人か出品され、私も参加いたしました。結果としまして高

山の方々が金賞をいくつも受賞されました。お米作りつて年に一度の収穫に賭けて取り組まれているので、丹精込めて作ったお米が金賞に選ばれて、涙を流されて喜ばれている農家のお父さんのお姿を見ました。

中田 大野市は水が綺麗だし、寒暖差もありますので、そういうことができる素地がありますよね。品質にたどり着く後押しをしようと、大野市独自のお米コンテストを実施しています。大野市金賞米は大変美味しいお米ですので、道の駅などで販路を確保しつつ、できる限り高価格帯に設定して販売することで、農家さんにお返しをできるようにしていきたいですね。

大野市内には中部縦貫自動車道の沿線に道の駅が二つ、道の駅九頭竜と道の駅越前おおの荒島の郷があります。道の駅と言えば地場産品がそろう農林水産物直売所が人気です。道の駅越前おおの荒島の郷が令和三年四月に開駅するのに合わせて、二つの道の駅に出荷する大野市道の駅産直の会が発足しました。現在、一二二件の農家さんが加入されています。中部縦貫自動車道大野油坂道路が開通すると中京方面からの来訪者が増えますので、道の駅直売所を新たな販売ルートとしていただき、農業を頑張ろうという農家さんの意欲につなげていきたいです。

また、地場産の野菜を使用している市内飲食店数の割合は、令和五年度実績で約六〇%となりました。令和八年度目標一〇〇%を達成できるよう飲食店へ働きかけていきます。

大野市特産物としましては、里芋、ネギ、穴馬

スイートコーン、舞茸などがあるのですけれど、

上庄里芋は地理的表示（G I）登録されていますから一番特徴的です。粘り気が少なく煮崩れしにくい歯ごたえのある食感が特徴のとても美味しい里芋です。農作業に手間がかかることから近年の収穫量が減少しているため、福井県やJ Aの方々のお力をいただきながら、作付面積を拡充できる農家さんへの支援を手厚くしています。

水田と里芋畑がモザイク状に配置されているのが大野市らしい田園風景です。里芋は連作障害がある作物で、毎年植える場所を変えなければいけません。前年里芋が植わっていたほ場に今年に行くと、そこは水田になっています。

担い手が減少する中で 大区画のほ場整備は必要

中田

現在、大野市では塚原地区で大区画のほ場整備事業の計画が進んでいますとお聞きしたのですけれども、事業の取り組みについてお聞かせいただけないでしょうか。

石山 塚原地区など県営で実施されるほ場整備事業には、国や県の補助金等を充てることができます。しかし、事業の取り組みについてお聞かせいただけないでしょうか。

中田 現在、大野市では塚原地区で大区画のほ場整備事業の計画が進んでいますとお聞きしたのですけれども、事業の取り組みについてお聞かせいただけないでしょうか。

石山 塚原地区など県営で実施されるほ場整備事業には、国や県の補助金等を充てることができます。しかし、事業の取り組みについてお聞かせいただけないでしょうか。

ことで、大区画のほ場整備を促進しています。

中田 私が福井県庁に勤務していた時には、既にその制度があり、県の負担を手厚くして、それに合わせて市町にも負担をしていただくことで、なるべく地元負担を少なく、ということをやっています。

石山 制度は当時から変わっていないと思います。市と地元の折半ルールは平成二十年代から実施されていて、私もそれを引き継がせていただいている。塚原地区では大区画化に入りますので、県の上乗せ部分については、地元負担分から差し引く形にしました。

中田 担い手が不足する中で、例えば大区画ほ場整備などはこれから農業にとって必要なことだと思いますが、これから農業についてどのように考えておられますか。

石山 令和三年のほ場の整備状況は、1 ha以上の

大区画施工面積が一〇・九%に留まっています。農家の数が減っている、あるいは担い手に集約されていることを考えますと、スマート農業がしあくなるよう大区画化が必要です。農家の方でも、ドローンであるとか無人田植え機とか色々な機械の扱いに、高齢の方々も青年の方々も意欲的に取り組まれています。

中田 担い手不足については、農を含む第一次産業が先行していると感じます。集落営農組織などでは、企業等を退職されてから農業組織に入られる方が多いです。ところが、六〇歳の定年が延長されて六五歳になりましたので、六五歳から農業に入つてこられた方が、コンバインなど大きな機械を運転できるだろかとか、最近出てきたAIとかド

ローブみたいなデジタル機器を操作できるだろうかということが問題になります。そうしますと、若い方が早いうちから農業に入つてこられるよう、機械化・無人化といった効率化を導入していく必要があります。

福井県では全域にGPS基地局が入って今年で三年目になりました。一年目は有人で田植え機を動かして水田範囲を測り、二年目の田植え時は一年前に測ったデータを覚えた無人の田植え機が出動しました。私も現場を見せてもらいました。スマート農業が現場でできることが分かってきて、今年は更にという形になつてきています。また、そういう機器を導入しようという農家の方も出てきていますから、機運の高まりを感じます。

大野市のきれいな水の保全と活用について

中田 農業以外のお話も少し伺いたいと思います。

先ほど、大野市のきれいな水や環境と言われていましたが、大野市には多くの湧水があり、国土庁の水の里一〇〇選に認定されたり、市が取り組んでおられる地下水保全活動が日本水大賞の環境大臣賞を受賞されたり、ということを伺っています。水というのは、人の暮らしにとつて、環境も含めてなくてはならないものだと思いますが、大野市では、水の保全と活用についてどのような取り組みをされているのでしょうか。

石山 市内には古くから各地に水が湧き出すところが数多くあり、これらを「清水（しうず）」と呼んで、人々がさまざまな用途に利用してきました。今日においても、市街地を中心に各家庭で



直接地下水をくみ上げて生活用水に利用するなど、惠まれた水環境がもたらす恩恵を受けながら生活をしています。

市民が地下水に寄せる関心は高く、水量や水質の確保、生態系の保全など水環境に関するさまざまな課題に対応するために、これまで各種の行政計画を策定して取り組んできました。

平成二十六年の水循環基本法施行を契機に、これまで取り組んできた地下水保全の視点に加え、表流水も含めた大野市全域での水循環を一体的に捉えて課題を整理し、事業者や有識者、関係団体、市民、公的機関等のそれぞれが互いに連携・協力して、さらなる水循環の健全化に取り組むために「大野市水循環基本計画」を令和三年二月に策定しました。

同計画冊子表紙に「健全な水循環のまち」のイメージ図を掲載していまして、地下水を利用するとか湧水のある景色を楽しむ、水辺で遊ぶ、生き物を調べるなどに加えて、直売所で野菜を買うことや、地産地消を支えることも描かれています。三つある基本方針の一つ目は、流域マネジメントの推進です。水を使いたい放題使つてしまつたら枯渇してしまうことがありますので、流域マネジメントという言葉が使われています。私達が水を全てコントロールできるわけではありませんが、上流から下流まで、水を使っている様々な人や主体がそれぞれ役割を果たしていこうと、大野市水循環推進協議会を設置しており、その中には農林水産業に関する事柄としましては、田んぼが地下水涵養に寄与していることが分かっていますので、ど

約四〇haの冬季水田湛水を継続実施し、農業水利施設の長寿命化対策及び共同活動による農地維持作業の促進に取り組んでいます。近年、大雨への防災対策として流域治水の考え方が広まりました。田んぼダムによる貯留機能の向上を期待し、来年度以降その面積を増やしていきたいと考えています。

基本方針の二つ目は、水環境に関わる人材の育成と水文化の継承です。流域マネジメントがうまく機能し一〇年続きますと、当たり前になつて、その大切さがだんだん分からなくなつてしまつて、いうことがあります。市民に不安を感じさせないという点では良いのですが、健全な水循環は多様な人々が関わることによって維持されているとい

う点も重要です。健全な水循環の重要性についての理解を深め、人材の育成と水文化を継承していくことが大切だと思います。大野市には「越前おのの水のがつこう」と「本願清水イトヨの里」という施設がありまして、そこでは大野固有の水環境や魚が生息する環境を解説しています。

基本方針の三つ目は、災害や気候変動、地下水障害等への対応です。近年、急に短時間で大量に雨や雪が降ることが増えました。一方では水不足ということもあります。水は多すぎても困るし、少なすぎても困ります。地下水位が低下し過ぎますと各家庭等において井戸水が枯れてしましますので、市内三ヵ所で地下水位の観測をしています。地下水障害対応タイムラインを作成し、基準観測井の水位により、地下水注意報・警報を発令する運用をしています。

中田 水は上流から下流までつながっていますし、あつて当たり前みたいなもので渇水などが起こつて改めてありがたみが分かるということもあるかと思います。単に地下水の保全ということだけではなく、水は上から下まで全てつながっている、それをこういう総合計画の形にしてしつかりまとめておられるということですね。

「星空保護区[®]」に認定された 日本一美しい星空



中田 もう一つ、大野市の星空が、「アーバン・ナイトスカイプレイス部門」で「星空保護区[®]」に認定されたという話をお聞きしたんですけど、一般にはなかなか耳にすることのない言葉ですので、ど

ういうものなのか教えていただければと思います。

アジアで初めて認定されたともお聞きしましたが。

石山 令和五年八月二十一日、大野市の南六呂師

エリアが「星空の世界遺産」とも呼ばれる「星空

保護区®」に認定されました。認定部門は「アーバン・ナイトスカイプレイス」で、この部門での

認定はアジア初となりました。

「星空保護区」とは、光害問題に取り組む

NPO「ダークスカイ・インターナショナル」が

認定する、暗く美しい夜空を保護するための優れ

た取り組みを行う地域のことです。

アーバン・ナイトスカイプレイスは、都市に近

く、夜間に人工的な光の影響を受ける中で暗い夜

空を保護するための優れた取り組みを行っている

地域が対象になります。

環境省の全国星空継続観測という調査がありま

して、平成十六年と十七年に、大野市の大矢戸と

南六呂師でそれぞれ、日本一美しい星空が見える

場所となりました。南六呂師エリアには、北陸最

大級の口径八〇cm天体望遠鏡やプラネタリウムが

福井県自然保護センター内にあります。

この地域資源を地域振興に活かそうと、平成

三十年から、福井工業大学と連携して星空観測

データの収集、宇宙や光害に関する子どもたちへ

の教育、星空保護区の認定申請などに取り組んで

きました。また、光害対策型防犯灯を開発された

パナソニック株式会社と連携し、地域住民の方々

のご理解をいただき、南六呂師エリア内の全ての

防犯灯をはじめ照明設備について夜空に光を放た

ない方法へ設置変更しました。

民間の方々におかれても宿泊施設の改修やお土

産品づくり、星空の下でハンモック体験やランタン

を飛ばすイベントなどを開催されました。

星空保護区の認定に至るまで、多くの関係者の皆様に関わっていただいて

おり、とてもありがたかったです。

石山 観光で来られる方に

とっても、きれいな星空を見

えることができるというの

は大きな魅力なのではない

でしょうか。

石山 南六呂師エリアに行つて雲一つない夜空を見

上げ、満天の星が降り注いでくるような光景をご覧になつたら、本当にびっくり、

感動しますよ。



日本一美しい星空

手軽に星空を眺めたいという方向けには、市内一斉ライトダウンデーを行う日などに、大野市役所の駐車場でも多くの星たちをご覧になります。天の川を見る事もできます。

星空保護区に認定されたことで各種メディアに

大野市を取り上げていただく機会が増えました。

星空を眺める目的で大野市に来訪され、宿泊や滞

在時間を延ばしていただくことで、地域経済への貢献につながります。

中田 これを維持しようと思つたら、いろんな制約などもあるんじやないでしようか。認定についても、一度認定されたらずっとということではないと想いますが。

石山 夜空の暗さを毎年調査します。人工的な光が漏れていないか、観測をして、結果をNPOへ報告しています。大野の夜空が世界的に素晴らしい地域であることを後世に伝えていくために、光害対策に関する普及啓発活動や次世代を担う子どもたちへの教育も継続しています。

新たな魅力増強として、六呂師エリアにおける滞在を促進するため、新しいキャンプ場「SORA to DAIICHI（そらとだいち）」が令和七年夏にオープンする予定です。多くの皆さんに現地をゆっくり訪れて、日本一美しい星空を愛でていただきたいと思います。

美味しい食が身近にある幸せが続くよう、農業者や土地改良関係者の笑顔につながる取り組みを

中田 楽しいお話をお聞かせいただいているうち



に時間がすいぶん過ぎてしましましたが、あと二つほどお聞かせ下さい。

市長は、現在福井県の農業会議の会長もされてるということで、これまで主に大野市のお話を伺つてきましたけども、福井県の農業や、福井県から見た日本の農業について感じておられることを教えていただければと思います。

石山 はい、農業とか農に関わる方々が前向きに取り組んでいただける、今後もつとそういうふうになるといいなと心から願っています。

根本的に人は生きしていくためにエネルギーを摂つていかなければならなくて、そういう意味で、美味しい食が身近にあるのはすごく幸せなことですし、美味しい農産物を農家の方々が作り出されているということは素晴らしいことだと思います。様々な課題はありますけれども、光を見出して、光を見出したところにみんなで努力をして取り組んでいくことが大事なんじゃないかと思います。

中田 非常に前向きなお言葉をいただきありがとうございます。いろいろな課題がある中で、農家が前向きに取り組めるよう行政としても後押しをしていただけだと、農家の方も頑張れるということがあります。最後に、今日お聞かせいただいたお話は、土地改良建設協会の会誌に掲載され、全国の土地改良関係者が目にすると思います。そういう方々へメッセージをいただければと思います。

石山 農業に大事なものはやっぱり水だと思います。大野市においては、早くから土地改良整備が進み、安定して水が流れてくるほ場があります。

私は農道を散歩しながら、農家さんが毎日、田んぼの水の量の管理をなさつていてる姿を拝見してきました。水の管理ができるのは土地改良施設がしっかりしているからです。水を安定的に農地へ運ぶのに大事な役割を担つていてのが土地改良施設です。土地改良施設が、安定的に安全に運営されていることが農家の笑顔につながつてきますので、どうか皆さんのが技術力を活かしてこれからも頑張つていただきたいと思います。

中田 本日は、長時間にわたり貴重なお話をお聞かせいただき本当にありがとうございました。ホームページで市長のプロフィールを拝見すると、先ほど市長も少しおつしやつておられましたけど、「まち歩き・むら歩き」がご趣味だと載つていました。日々お忙しいと想いますので、なかなか難しいのかもしれません。もう大野はくまなく歩かれたんですね。

石山 まちなかや集落の辺りを歩いていますので、大野のまち歩き・むら歩きはかなりできたと思います。体力不足で山歩きはすっかり行けなくなつてしましましたが。

中田 私もランニングやウォーキングが趣味の一つで、各地を訪れて空いた時間がある時に街中を歩いたりしていると、新しい発見があつたり、仕事のヒントになる新しい考えが浮かんだり、といふことがあります。今までもそうされてきているのだと思いますが、お忙しい中でお時間を見つけていろいろなところを歩いていたくことでまちづくりのヒントを見つけていただき、大野市の一層の発展につなげなければと思います。

石山 ありがとうございます。今日は楽しい時間

をありがとうございました。

中田 こちらこそ、今日はとても楽しく、良いお話をたくさん聞くことができて大変よかったです。どうもありがとうございました。

いしやま し ほ 石山 志保

大野市長

出身地 愛知県安城市

平成9年	東京大学工学部卒業
平成9年4月	環境庁入庁
平成17年3月	環境省退職
平成17年4月	大野市役所入庁
平成30年2月	大野市役所退職
平成30年7月7日	第17代大野市長（1期目）
令和4年7月7日	第18代大野市長（2期目）

